

中世文学に見られるカミの享受

課程博士の学位申請論文の目次を以下に挙げる。

序 論

一 本論文の課題

二 本論文の方法

三 本論文の構成と各章の課題

第一部 鎌倉期のカミの享受

第一章 東大寺大仏殿内の「両界堂」と伊勢神宮の「両宮」について

―『沙石集』冒頭話を中心に―

第一節 東大寺再建により波及した信仰

第二節 東大寺衆徒による伊勢参宮

第三節 叡尊と伊勢神宮御正体

第四節 『沙石集』巻一之一「太神宮の御事」について

第二章 『南無阿弥陀仏作善集』に見る新大仏寺という空間

第一節 善光寺での舍利感得と重源の聖徳太子信仰

第二節 重源の夢想と浴場信仰

第三節 新大仏寺という空間

第三章 法然関係資料に記された重源像について

―四十八巻本『法然上人行状画図』を中心に―

吉 田 唯

第一節 二尊院「浄土五祖像」

第二節 伊勢参宮記事と東大寺大勧進職

第三節 大原談義と入寂記事

第四節 重源の阿弥陀仏号と法然の三部経講説

第二部 鎌倉中期のカミの享受

第一章 『愛染王紹隆記』に記される同体思想

―叡尊の信仰と作者周辺をめぐって―

第一節 『愛染王紹隆記』内の東寺の記事について

第二節 愛染明王とアマテラスの関係性

第三節 八幡大菩薩と愛染明王の同体について

第二章 『日誦貴本紀』の国譲り神話に見るアマテラスの両性具有性

第一節 両性具有とカミ

第二節 愛染明王信仰について

第三節 『日誦貴本紀』における愛染明王

第三章 アマテラスの「呼称」と「赫姫」という存在

―『塵荆抄』第十一話を中心に―

第一節 アマテラスと愛染明王をめぐる同体思想

第二節 アマテラスの呼称

第三部 室町期のカミの享受

第一章 『諸神本懐集』におけるアマテラス像について

―『神本地之事』との比較を通して―

第一節 「国譲り神話」の比較

第二節 日天子・月天子について

第三節 『諸神本懷集』内のアマテラス像

第四節 室町期までの祖師のイメージについて

第二章 覚如の伝記に見る和歌と神祇について

―『沙石集』との影響関係を中心に―

第一節 『慕婦絵』に登場する神祇

第二節 覚如の神祇観について

第三節 和歌と神祇の享受の背景

第四節 『沙石集』における源信と『慕婦絵』における覚如像

第三章 佛光寺本『善信聖人親鸞伝絵』に見る神祇記述と構成について

第一節 『親鸞伝絵』の神祇観

第二節 付加された神祇記述

第三節 佛光寺本の性格について

結語

一、問題の確認

二、各章のまとめ

三、真宗の神祇観の位置づけ

【要 旨】

本論文は、中世文学に見られるカミの享受について明らかにすることを目的としたものである。

全体を三部に分け、第一部では、東大寺再建事業と事業に付随して広がりを見せた思想面について検討し、第二部では叡尊を中心と

中世文学に見られるカミの享受

した両部神道の問題、第三部では、真宗の神祇観について扱った。

全体として、両部神道も真宗の神祇観も、個別の事象ではなく、東大寺再建事業により波及した問題を継承したものであることを検討したものである。

【序 論】

まず序論において、中世神話に関する先行の研究を検討し、問題点を提示している。

「中世神話」は、江戸時代の国学者に忌み嫌われるように、「日本書紀」の純粹な註釈書とはいえない。中世神話は、中世期の神と仏の相克を如実に記したものであり、「日本書紀」の「読み替え」と評価されているのが現状である。^②

中世の神話や神道については、山本ひろ子氏を筆頭に、近年盛んに研究されている。二〇一一年に発表された伊藤聡氏の『中世天照大神信仰の研究』や松田淳一氏の『神仏の儀礼の中世』^④、二〇一二年原克昭氏の『中世日本紀論考』は、中世期の『日本書紀』の註釈の有りようや、両部神道や山王神道・吉田神道に関する神話や教説について論じている。また、原氏と同じ二〇一二年には、鈴木英之氏が『中世学僧と神道』と称して、浄土宗の神祇についての考察を行っている。このように、中世神話は、限られた世界での出来事ではなく、宗派を超えて生成されたと言えるだろう。

そこで、本論文では、先行研究でまだ研究が成されていない真宗

の神祇が、中世神話世界の中でいかに位置付けられるのかということを考えてみたい。真宗は、他宗派と違い、神祇不_レ拜_ヲを推奨しているという大きな特色を持つ。^⑦勿論、浄土宗も同様であるが、真宗の場合は、中世神話独特の難解な註釈作業を行っていない。浄土宗は鈴木氏の著作によると、南北朝から室町時代の浄土宗第七祖である聖阿闍梨が、『日本書紀』や『麗氣記』の註釈のみならず、鹿嶋明神の縁起を記す『鹿嶋問答』を執筆している。一方の真宗では、『日本書紀』の註釈書は勿論のこと、『麗氣記』のような両部神道の註釈を行うことも、文中に記すこともない。このことも、真宗の神祇観の特色と言えるのではないだろうか。本論文では、これら真宗が持つ神祇観の特色は、広く中世期の神話世界を考える際に無視出来ない事象であると考え、真宗の神祇観を通して、中世期のカミの有りようを学際的に捉えたものである。

二、本論文の方法

次に方法であるが、神祇不_レ拜_ヲと称する真宗が、神祇を採り入れた背景や過程、中世神話世界での真宗の神祇の位置付けを明らかにするために、両部神道等との比較を行う必要があると考えた。それは、元々、神祇を許容する他宗派と、神祇不_レ拜_ヲを主張する真宗では、神祇の受け入れに差異が生じると考えるからである。今回、両部神道を比較対象としたのは、他神道に比べて、比較的研究が進んでいる分野であることによる。

真宗の神祇観はまず、国枝正雄氏「真宗の神祇観について」^⑧によって、覚如（一二七一—一三五二）が著した親鸞の伝記である『善信聖人親鸞伝絵』をもとに、「此物語は寧ろ覚如が親鸞の訓示の語に寄せて、真宗の神祇観を述べたものではなからうか」と位置付けられている。また、林智康氏も「真宗における神祇観」の中で、「覚如の神祇観は本地垂迹説の上に成り立ち、安易な神祇崇敬の態度が見られる。これは厳しく神祇不_レ拜_ヲに徹し、真実信心の利益による神祇護念を主張した親鸞の神祇観との乖離が生じている」^⑨と、神祇不_レ拜_ヲを主張する親鸞の神祇観から乖離していると指摘している。このような、神祇不_レ拜_ヲを旨とする真宗が、神祇を採り入れた背景について黒田俊雄氏は「中世国家と神国思想」の中で次のように述べている。^⑩

覚如、存覚時代の真宗の著作が、なぜこのように一向専修（専念）の論理を骨抜きにしてまで神国思想を採用しなければならなかったか。これが、前節にのべた時代全般の傾向と無関係でないことだけは、あきらかである。さきにものべたように、当時の記録によれば、専修念仏の徒の神祇不_レ拜_ヲに対する非難はつねにくりかえされたし、客観的にみても専修念仏の発生基盤は依然存在した。しかしそれにもかかわらず、弾圧をさけるためには、まして教団を組織するためには、権力者の思想に屈従しなければならなかったし、神祇不_レ拜_ヲの激発を防止するために、上述のような論理が必要であつたのである。

黒田氏は、弾圧を避けるための手段として、真宗が神祇を受け入れたとしている。黒田氏の論中に覚如と共に登場している存覚（一二九〇—一三三三）は、二度、父である覚如に義絶され、真宗初の神祇書である『諸神本懐集』を著した人物である。先ほどの林氏は、この覚如の息子である存覚の神祇に関する記述内容が『興福寺奏状』で貞慶により非難された箇所と類似していることを指摘している。^⑫

存覚による真宗初の神祇書である『諸神本懐集』は、江戸時代の了祥・義順・桑梁等の学僧により註釈作業が行われる。この頃より、問題となるのが、『諸神本懐集』の奥書を廻る問題である。

現在では、『諸神本懐集』の底本が、北西弘氏により発見された『神本地之事』であるとの見解が主流である。^⑬この発見は、『諸神本懐集』と類似する事柄を記している書が存在するということを示した点で大きな意義がある。しかし、そこから、一步踏み込んだ、詳細な本文の比較検討については、『神本地之事』の発見以降、全く進んでいないのも現状である。そこで、本論文では、『諸神本懐集』と『神本地之事』の「国譲り神話」を比較検討することにより、双方の本文の影響関係を考察した。同時に、文学作品から見る神祇観を主題とすることから、真宗の教義書のみを考察するのではなく、法然・親鸞・覚如の所謂、祖師の絵伝を通して見られる真宗の神祇観の考察も行った。

更に、『諸神本懐集』と同時代期に成立している、両部神道の流

れを汲む『日諱貴本紀』の「国譲り神話」との比較検討も行った。このことにより、真宗独自の神祇観と、両部神道との間で共通する神祇観を明らかにした。

今回、真宗の神祇と両部神道を結ぶ手がかりとして、俊乗房重源（一二二一—一二〇六）と東大寺再建事業に着目した。重源は、南都炎上後の東大寺を再建した人物である。杉山二郎氏は、重源等と共に南都復興に携わっていた工人などが、復興事業の修了と同時に職を失い、社会問題となっており、その階層や衆庶への救済に叡尊が焦点を当てたとし、重源から叡尊へ繋ぐ鎌倉仏教の一面は、阿弥陀仏号の踏襲に見られる南都旧仏教の庶民への働きかけであると位置づけている。つまり、重源が東大寺再建事業に際して重宝していた工人達を重源亡き後に、叡尊が引き継いだということである。その中には、重源により阿弥陀仏号を付された、阿弥陀仏号保持者もいたのである。この阿弥陀仏号保持者は、叡尊周辺のみならず、法然や親鸞の周辺でも度々目にする事となる。このことから、専修念仏教団も、少なからず阿弥陀仏号保持者を重源亡き後引き継いだと考えられる。更に、『法然上人行状画図』には、重源の伊勢神宮参詣記事も記されている。

このような事象をもとに、重源より伊勢神宮参詣と阿弥陀仏号保持者を継承したと思しき、叡尊を中心とする両部神道と、専修念仏教団の特に真宗の神祇を比較検討することを本論の主眼とした。以下各章ごとの要旨を述べる。

第一部 鎌倉期のカミの享受

第一章 東大寺大仏殿内の「両界堂」と伊勢神宮の「両宮」について―『沙石集』冒頭話を中心に―

第一部は、鎌倉期のカミの享受として、重源の東大寺再建事業と、その享受について考察した。第一章では、鎌倉期に東大寺大仏殿内に造られた「両界堂」が、伊勢神宮の内宮・外宮と団体視されていたことを指摘し、この思考が、叡尊の「伊勢神宮御正体」そして、無住の『沙石集』の冒頭話に至ったと結論付けた。単的に述べると、信仰や空間的なものから文学作品に思想が受け継がれた過程の検証である。

第二章 『南無阿弥陀仏作善集』に見る新大仏寺という空間

一章の補足として、重源の集大成とも言うべき『南無阿弥陀仏作善集』に記される二つの夢想と、新大仏寺を中心に、重源の信仰について考察を行った。このことにより、新大仏寺という空間が、重源の東大寺で成し得なかった思考の場として存在し、聖武天皇と光明皇后の夫婦和合の象徴的な「場」として存在したことを明らかにした。

第三章 法然関係資料に記された重源像について―四十八巻本『法然上人行状画図』を中心に―

四十八巻本『法然上人行状画図』に記される四点の重源の独自記述が記された所以が、東大寺再建事業に付随した重源の阿弥陀信仰を専修念仏教団が無視出来なかったことによると解明した。これは、叡尊の活動にも法然周辺にも頻繁に阿弥陀仏号保持者の存在が確認出来ることから裏付けられる。端的に述べると、二部で扱った叡尊等西大寺流が、東大寺再建事業で活躍した工人達を、三部で扱った専修念仏教団が、信仰者を継承せざるを得なかったということである。最終的に『法然上人行状画図』の記述は、東大寺ありきの重源の記事ではなく、重源の阿弥陀仏号踏襲のために東大寺再建事業について示し、重源が法然の門下であったことを印象付けることこそが目的であったと結論付けた。

第二部 鎌倉中期のカミの享受

第一章 『愛染王紹隆記』に記される団体思想―叡尊の信仰と作者周辺をめぐって―

第二部は、鎌倉中期のカミの享受として、愛染明王とアマテラスの団体思想を中心に考察した。第一章では、『愛染王紹隆記』の作者と叡尊周辺の思想について検討を行った。検討の結果、『愛染王紹隆記』は、叡尊等により波及した思想形態の中から生まれ出た文学であることを明らかにした。また、東大寺再建事業の際の工人の面倒を引き受けた叡尊が、東大寺を意識しつつ西大寺に愛染明王を安置したとも言及した。つまり、大日如来と愛染明王を団体視もしく

は、大日如来に匹敵する尊格として愛染明王を意識していたのではないかという検証である。

第二章 『日諱貴本紀』の国譲り神話に見るアマテラスの両性具有性

第二章では、『日諱貴本紀』に記される国譲り神話に着目した。『日諱貴本紀』内においてアマテラスは男性性・女性性の両性を具有している神として描かれている。しかも、両性具有の祖と位置づけられているのである。このアマテラスの両性具有性については、『日諱貴本紀』の国譲り神話と類話を記す『大神宮本縁』や『日本記三輪流』に見られるものではなく、『日諱貴本紀』のみに見られるのである。更に、『日諱貴本紀』に登場するアマテラスは、愛染明王とも同体を遂げている。

このような現象について、院政期の愛染明王は、修法の中の仏であつたのが中世期において、後背が日輪であるという形容と二元性により大日如来やアマテラスとの同体を成し遂げたとし、その背景には、愛染明王の二元性の中に含まれる両性具有性が大きな役割を果たしたと分析した。

第三章 アマテラスの〈呼称〉と〈赫姫〉という存在―『塵荆抄』第十一話を中心に―

第三章では、『塵荆抄』第十一話に載せられている『竹取物語』

中世文学に見られるカミの享受

とアマテラスを中心とした同体思想について、浅間権現と千眼大菩薩のルビに着目し、そこから春日明神や愛染明王との同体という問題について考察を行った。

『塵荆抄』内に記される「天照太神」は、兜卒天から反魂香により富士に降りて来て「大日靈尊」という呼称に変化しており、男性の「浅間権現」は（もしくは男性のような容姿）、「千眼大菩薩」という呼称に変化することにより、女性となって顕れている。そして、「大日靈尊」は「大日如来」との同体は果たし、一方の「千眼大菩薩」は「愛染明王」との同体を果たすことになる。大日如来とアマテラス・愛染明王との同体は、中世期に度々見られる習合思想のパターン化されたものの一つであり、これらが更に「赫姫」へと変貌を遂げることが可能なのではないかと考えた。つまり、『塵荆抄』では、『日諱貴本紀』内で見られた、アマテラス・愛染明王・大日如来の同体に、赫姫をも取り込むという、思想的広がりを見ることが出来ると結論付けた。

第三部 室町期のカミの享受

第一章 『諸神本懐集』におけるアマテラス像について―『本地之事』との比較を通して―

第三部は、室町期のカミの享受と題し、第一章では、真宗初の神祇書である『諸神本懐集』に記されるアマテラス像について究明した。アマテラスは、他宗において大日如来と他の尊格を介さずに同

体を果たしていたにもかかわらず、『諸神本懷集』で記されるアマテラス像は、観音より格下に扱われるだけでなく、勢至（スサノオ）の力を借りなければ阿弥陀に帰着出来ない存在として描かれている。しかも、此程、他の尊格を介しても阿弥陀と団体ではなく、観音・勢至を合わせて、やっと阿弥陀に至るという次元に留まっているのである。つまり、『諸神本懷集』は中世期に見られる神国思想を積極的に取り入れながらも、肝心の阿弥陀や祖師との関係については、真宗独自の見解を見せていると結論付けた。

《第二章 覚如の伝記に見る和歌と神祇について―『沙石集』との影響関係を中心に―》

第二章では、覚如の伝記である『慕帰絵』に記される神祇記述について検討を行った。その結果、『慕帰絵』に記される神祇記述は、何れも覚如が和歌を詠ずることにより登場していることが明らかとなった。これは、一章で扱った『諸神本懷集』と同様に、真宗が神祇を手放しに許容したのではなく、あくまでも和歌の神であるために許容されるに至ったと検証した。

《第三章 佛光寺本『善信聖人親鸞伝絵』に見る神祇記述と構成について》

第三章では、佛光寺本『善信聖人親鸞伝絵』に記される、親鸞の伊勢神宮参詣と鹿嶋神宮参詣の記事について考察を行った。その結

果、佛光寺本『善信聖人親鸞伝絵』は、覚如が記した親鸞による神祇崇拜に関する記事を、より全面に押し出すことに成功したといえる。つまり、覚如が記した『善信聖人親鸞伝絵』内の親鸞と神祇の関係は、親鸞が直接神社へ詣でるのではなく、門徒の夢告に親鸞が登場したり、熊野権現について、法然や親鸞が語ったりという間接的なものであった。それが、第二章で考察した覚如の伝記である『慕帰絵』になると、和歌への憧憬という名目で、覚如自らが神社へ参詣をし、神祇歌まで詠じているのである。このような神祇への接近が、最終的に佛光寺本『善信聖人親鸞伝絵』の親鸞の参詣記事に至ったという享受の過程についても指摘した。

結 語

第二部で考察を行った『日諱貴本紀』の「国譲り神話」と第三部で考察した『諸神本懷集』の「国譲り神話」の比較を通して、両部神道と真宗のアマテラス像についての検討を行った。その結果、『日諱貴本紀』や東大寺等でアマテラスは、大日如来との団体を離れなく果たしていたにも拘わらず、真宗では、阿弥陀との団体が単体では叶わない存在という認識であった。そればかりでなく、アマテラスは、スサノオとの兄弟喧嘩の末に、天の岩戸に立てこもるという幼児性すら残す存在としても描かれていることも明らかとなった。しかしながら、『日諱貴本紀』・『諸神本懷集』の双方に共通して記されている事柄もある。当然と言えば当然であるが皇統について

である。両書とも、アマテラスの末裔として天皇を意識している。

現時点での結論は、『諸神本懐集』は神祇を、手放しに許容したわけではなく、他宗からの非難により許容はしたものの、阿弥陀とアマテラス、祖師とアマテラスの間には超えられない壁が存在することも指し示した書であつたのではないかと考える。この神祇の理解こそが、阿弥陀一仏に帰依をする真宗の独自性ということになる。また、『諸神本懐集』が、対外的に神祇について記した書であることから、神祇を全面的に記す内容ではあるが、他に真宗の聖教で神祇のみを解いた書や注釈書が見つからないのも、真宗の神祇の特徴と言えるであろう。存覚や覚如の著作に、権者や実社についての言及は確認出来るが、何れも、阿弥陀あつての神祇であり、阿弥陀とカミは決してイコールとはならない存在なのである。

『諸神本懐集』が、阿弥陀とアマテラスの格の違いを見せつけたのに対して、祖師が神社に参詣するさまを提示したのが、『善信聖人親鸞伝絵』と覚如の伝記である『慕帰絵』、そして佛光寺本の『善信聖人親鸞伝絵』である。勿論、佛光寺本の『善信聖人親鸞伝絵』を通常の『善信聖人親鸞伝絵』と同格に扱うのではなく、神祇を『善信聖人親鸞伝絵』や『慕帰絵』が許容する中で、佛光寺本の『善信聖人親鸞伝絵』が生み出されたとの位置付けである。

このような祖師の参詣記事は、一見すると、『諸神本懐集』で祖師とアマテラスが一線を画す存在であることを提示したことと矛盾しているようにも感じられる。しかし、伝記の参詣記事を確認する

と、親鸞は、王法（伊勢神宮）や、出自である藤原氏（鹿島神宮）への参詣であり、覚如は、和歌への憧憬故の参詣なのである。そして、それ以外の神社は、門徒による参詣であり、親鸞や法然は、夢中等に現れることがあつても、実際には赴かない描き方なのである。つまり、祖師達の参詣は、王法や氏神、和歌という理由が存在しない限り行われないということを示していると言ひ得る。このことは、『諸神本懐集』同様に、伝記についても、手放しに神祇を受け入れたのではなく、あくまでも、理由があつての受容（許容）なのである。この姿勢は、祖師達が、神々と同体を果たすこともなく、『日本書紀』等の神祇書の注釈も行っていないことにも現れていると結論付けた。

註

- ① 日本中世期に見られる、神祇信仰全般について用いている。
- ② 齊藤英善氏『読み替えられた日本神話』（講談社・二〇〇六年）参照。
- ③ 山本ひろ子氏『変成譜 中世神仏習合の世界』（春秋社・一九九三）、『異神 中世日本の秘教的世界』（平凡社・一九九八）、『中世神話』（岩波新書・一九九八年）等に詳しい。
- ④ 伊藤聡氏『中世天照大神信仰の研究』（法蔵館・二〇一一年）、『神道とは何か―神と仏の日本史』（中央公論社・二〇一二年）、松田淳一氏『神仏の儀礼の中世』（法蔵館・二〇一一年）。
- ⑤ 原克昭氏『中世日本紀論考―註釈の研究』（法蔵館・二〇一二年）。
- ⑥ 両部神道とは、真言宗の立場での神仏習合。山王神道とは、天台宗の立場での神仏習合。吉田神道は、吉田神社を中心とした神仏習

合思想。

⑦ 本論文で使用する際の、「不拝」は、拝むなという強意の意味ではなく、取り立てて拝する必要がないという認識での「不拝」である。

⑧ 聖徳太子に仮託した両部神道書。

⑨ 国枝正雄氏「真宗の神祇観に就いて」(『国史学』第二〇号・一九三四年)。

⑩ 林智康氏「真宗における神祇観」(『真宗学』第七八号・一九八八年三月)。

⑪ 黒田俊雄氏「中世国家と神国思想」(『日本中世の国家と宗教』岩波書店・一九七五年・二七七頁―二七八頁)。

⑫ 前掲注⑩林氏論文に同じ。林氏と同じく、高田未明氏も「存覚の神祇思想について」(『印度学仏教学研究』第五十五号一号・二〇〇六年)の中で、非難する側の思考を探り入れることについて「既成仏教教団と同じ立場に位置し、教団の同等性を主張することになったとみられる」と言及している。

⑬ 北西弘氏「諸神本懐集の成立」(『宮崎博士還暦記念真宗史研究』所収・永田文昌堂・一九六六年)。

⑭ 杉山二郎氏「へ特別公演」鎌倉新仏教と密教・重源から観尊へ」(『密教学研究』二六号・一九九四年)。